

高木正一著

杜甫



中公新書

185

中公新書 185

高木正一著
杜甫

中央公論社刊

高木正一（たかぎ・まさかず）

1912年（大正1年），大阪府に生まれる。

1947年，京都大学文学部文学科卒。

専攻，唐代文学史。

現在，立命館大学教授。

著書『唐詩選』訳解上・下（中国古典選，朝日新聞社）

『白居易』訳註上・下（中国詩人選集，岩波書店）

社 甫
中公新書 185
© 1969 年
検印廃止

昭和44年4月15日印刷

昭和44年4月25日発行

著 者 高 木 正 一

発行者 山 越 豊

本文印刷 三晃印刷
表紙印刷 東京プロセス
製 本 小泉製本

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2-1
振替東京34 電話(561)5921代

価230円

まえがき

いつの世もいきどほるべきことさはなれど杜陵のごとくいきどほるはまれ

これは杜詩の愛読家、土岐善麿氏の歌であるが、氏のいわれるごとく、杜陵の詩人杜甫は、たしかによく憤った。しかもその憤りたるや、彼の性来の正義感と、若いころから培った儒教倫理に深く根ざしたものであり、たんなる興奮的突発的な怒り、腹立ちといったものではない。

おのれこそは、古代最高の賢人たる稷^{しよく}と契^{せう}にも比すべき、君主のよき補佐官だと自負自任していた彼は、みずからの君主玄宗皇帝を、堯舜以上の地位にまですすめまいらせ、軽薄な風俗を、もういちど、堯舜の世のごとく、うつくしいものにしてみたいと熱望していた。

その熱望を実現するため、彼は政府に枢要の地位を得べく、懸命に努めはげんだが、期待はことごとくに裏切られ、よわい四十になんなんとしながら、なおも花の都の浮浪人として、失意と貧窮の境涯をかこたねばならなかった。

むろん、それは彼にとってがまんのならぬ腹立ち、悲しみであったが、より以上に彼を悲しませ、腹立たしめたものがある。久しくつづいた繁栄のかげに巣くう社会矛盾のかずかず、それを正そうともせずに、私利私欲をはかりつつ、皇帝の治世を頽廢、破滅の淵へとみちびいてゆく権

力者たちの不正と横暴がそれであった。性、「悪を疾んで剛腸」なる彼は、これを黙視するにしのびず、時にその憤りは火と燃えさかった。

と同時に、文学のあり方を追求するなかで、つとに「詩経」の諷諫精神を継承せんと志していた彼は、その憤りを無遠慮に詠じて、時政を批判し、時の権力者たちに手きびしい批判の声を浴びせるとともに、一方では、社会の矛盾と悪政下にあえぐ人民たちに、人間的な温かい同情をふりそそいだ。かくて誕生したのが、一連のいわゆる社会詩であり、それは政治批評、社会批評を基本とすることによって、従来の詩に質的転換をもたらす、革新的な一となみとなった。

さて、彼はまた憂愁の詩人ともいわれるごとく、しきりに憂え、かつかなしんだ。彼が日ごろ憂慮していた国家の運命は、安史の乱を契機として大きく揺れ動いたが、それとともに彼の運命もまた大きく揺れ動き、はては、一時ものにした官職をもなげ棄てたあげく、家族もろとも、ふたたび帰ることなき、悲しい漂泊の旅に立ったのである。以後十年余にわたる長いさすらいの旅のなかにあって、彼はなおも世を憂え、国を憂えつづけるが、同時に彼はまた、親戚や知友と別れ、政治とも無縁な存在になりはててゆくおのれを顧みながら、えもいえぬ寂しさと悲しさにおそわれるのであった。

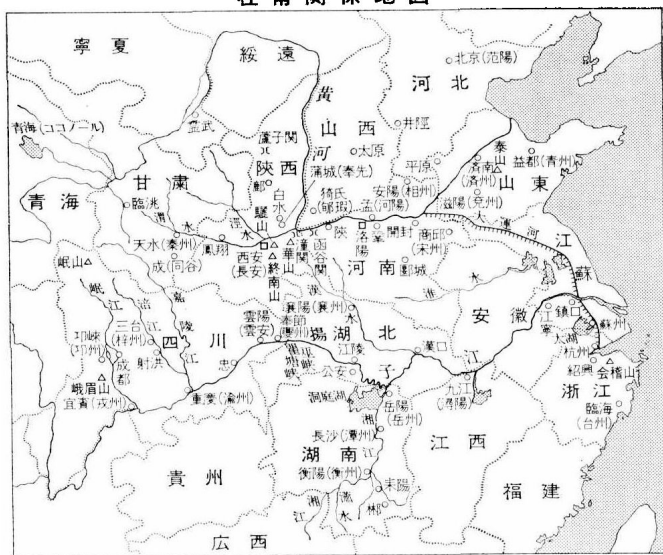
このころから、彼の悲しみは、年とともに深まりを見せ、内向性をおびながら、みずからのなかにひたすら閉じこもろうとする。そこに彼の詩の抑鬱的な抒情性が一段と深まり、高まってゆ

く。とくに晩年、夔^き州に滞在していたころの詩にその傾向が顯著であり、津々と泉のごとく湧きでる深い悲しみが、ずっしりとした重みと、いぶし銀のようなおもむきをもって、悲痛に歌いあげられている。

しかもそうした悲しみは、さきなる憤りがより多く長編の古体詩形で発散的に歌われたのとなり、南朝らしいの新詩形である律詩によって、きわめて凝縮的に詠ぜられた。そこには、他の追隨を許さぬ、彼独自の厳密精緻な表現と、時には飛動し、時には沈鬱する内心の細かなおのきとの、みごとな融合統一の姿が示されていて、まさに入神の妙技を発揮する。

以上、私は杜甫の詩を、とくに憤りと悲しみの二つの面からとらえてきたが、この二つを中心的な主題感情としながら詠ぜられる彼の詩には、さらに人を、自然を、温かくつつみこんだ彼のやさしい愛情がうかがわれ、人生への誠実さを教えるとともに、国家社会のことを考えさせる人間の文学として、大きな成長をとげている。この小著は、そうした成長のあとを、彼の生きた時代、彼の歩んだ人生とともに眺めてゆこうとするものである。

杜甫關係地圖



目次

まえがき

I 賢人政治への憧れ——前半生

1 家系と生い立ち

2 開元全盛の日と呉越旅行

3 快意八九年の斉趙旅行

4 旅食す 京華の春

5 新詩境の開拓

6 玄宗治世の危機

7 放歌 愁絶を破る

8 乾坤 震蕩の中——安祿山の反乱——

9 国破れて山河在り

10 涕淚して拾遺を受く

Ⅱ 漂泊の旅——後半生

1 華州にて

2 漂泊の旅立ち——秦州から同谷へ——

3 成都の浣花草堂

4 蜀中転々の放浪

5 ふたたび浣花草堂へ——幕府生活——

6 天地の一沙鷗

7 孤城 白帝の辺

8 江漢 思帰の客

参考文献

杜甫年譜

あとがき

杜
甫

I
賢人政治への憧れ——前半生



杜甫像 蔣兆和作

1 家系と生い立ち

唐室中興の英主とうたわれた玄宗が父睿宗の讓位を受けて、正式に皇帝の位についたのは西暦七十二年。その即位とともに年号は先天元年と改められたが、大詩人杜甫が生まれたのはすなわちこの年である。

生地は、当時の控えの都、洛陽の東方九十キロに位する黄河沿いの小都市、鞏県であつたらしい。曾祖父の杜依芸がここの県令に任官して以来、杜の家は、これまでの本拠地、湖北の襄陽を去つて、この町の住人となつてゐるからである。

父の名は閑。この人は社会的にあまりふるわなかつたとみえ、諸方の地方官歴任ののち、奉天、すなわちいまの陝西省乾県の県令となつたというほか、その伝記は詳らかでない。

これに反して祖父の杜審言は、則天武后朝の詩人として有名な人であつた。高宗皇帝の咸亨元年（六七〇）、進士に及第、則天の朝に仕えて膳部員外郎となり、つづく中宗皇帝の景龍二年（七〇八）、すなわち杜甫の生誕に先だつこと四年に、修文館直学士を最後の官として亡くなつた。官吏としてはあまり成功したといえぬが、李嶠・崔融・蘇味道とならんで「文章の四友」と呼ばれた書翰の名手であり、また宋之問・沈佺期らとならぶ律詩の妙手として、当代にきこえた名高い

詩人である。

この詩人を祖父にもつことに、杜甫は大きな誇りと責任を感じていた。終生彼が詩作に身を打ちこんだこと、あるいはその晩年、次男宗武の誕生日に、「詩は是れ我が家の事なるぞ」といつて、これを誡めていることなどに照らして明らかであろう。

さらに杜甫がもう一つの誇りとしたのは、杜預とよばれる人物を遠祖にもつことであつた。この人は字を元凱げんがいといい、三世紀のおわり晉の武帝の創業をたすけて鎮南大將軍となり、ひさしく南方揚子江の流域に勢力を張つた呉の国を平定して、三国鼎立の形勢にとどめをさし、その赫々たる武勲によって当陽侯の称号を授けられた名將である。

それにも増して彼の名が後人に長く知られるのは、春秋左氏伝の權威ある注釈書「春秋経伝集解」三十巻を著わした、儒者としての高いほまれのためである。杜甫が時にみずからの家のことを「京兆の杜氏」といつて誇るのは、この遠祖杜預のころまで、その家が京兆、すなわち漢の西京の畿内なる杜陵県にあり、そこにおける名族として世にきこえた由緒ある家柄であつたからである。

この遠祖杜預以来、八世紀の杜甫にいたるまで、十三代五百年ばかりの間、歴代の先祖は、京兆の旧居から甘肅の河西に、さらには湖北の襄陽、または河南の鞏県にと、いくたびかその本拠を移転しつつも、つねに儒者として、また仕官の家としての本分を守りつづけてきた。その間、

襄陽に移った五世紀のはじめから六世紀のなかばにかけて、杜の家は、襄陽を本拠としながら、ずっと南朝に臣属した。

それが北朝の臣下となったのは、五代の祖杜叔毘と しゅくひ以後のことである。この人も遠祖杜預の風をうけついで「左氏春秋に善けた」儒者であったが、より刮目されるのは、そうした文事よりも、むしろ武功の人であったということである。

最初は彼もやはり南朝の梁りやうに仕え、皇族のひとりなる宜豊侯蕭脩しやうしゅうの部将となり、北朝の西魏と対峙する最前線の南鄭をまもっていたが、やがて西魏の圧迫にたえかねた蕭脩が和を請うにおよび、講和の使者として西魏の国に派遣された。その留守中、同僚曹策そうさくのクーデターがおこり、西魏との間に直接の和約が締結され、彼のせつかくの苦心が裏切られたばかりか、その兄・甥までがクーデターの犠牲となって、曹策のために殺害されてしまった。かくて帰るところを失った彼は、やむなく西魏にとどまってその臣下となったが、まもなく仇人曹策も西魏に降り、二人は皮肉にもおなじ異国の朝廷で顔をあわす仲となった。

仁侠の人であった彼は、この時とばかりに復讐の血をたぎらせたが、年老いた母に累のおよぶことを恐れて隠忍自重した。その胸中を察した母が、「わたしのことは心配するな。曹策めをなき者にすれば、死んでも本望じゃ」とはげましたため、意を決した彼は、ついに白昼曹策をうちはたして兄と甥の仇をうち、従容しやうようとして縛についたという。

これに似た話が、祖父審言の次子なる杜并とへいにも伝えられている。父の審言が司馬季重しはきじゆうらのため無実の罪をきせられて獄につながれ、しかも事にかこつけて殺害されようとしているのを知った杜并は、憤激のあまり、わずか十三歳の少年にすぎなかったが、白刃をふところにして父の仇季重を刺し、自分もその場でうち殺されたという話である。「悪を疾にくみて剛つよき腸こころを懷いだく」とみずからの性格をのべる杜甫にも、長袖の公卿ならぬ、こうした北方武人の血が、脈打って流れていたとみてよいのではないか。

その血にまじって、彼の体内に流れていたもう一つの血は、生母崔氏さいのそれである。

この母は名こそ明らかでないが、その父にあたる崔氏が、唐の太宗皇帝の孫なる義陽王李恂りそうの姫君を妻としている事実からみて、おそらくは、当時の名族としてきこえた博陵の崔氏の出であったにちがいない。とすれば、その家もやはり華北の系統に属したが、一族のなかから文事にたけた知名の士を多く出している点では、より多く文人的であり、杜の家が武人的であったのと対照的な血統であった。

この相異なる血を一身に受けて生まれてきた杜甫は、父系から強い精神を、母系から感じやすい心を、その素質としてうけついただといつてよく、それが彼の人格または文学の形成にも、大きく作用している。

ところで、杜甫を生んだ母の崔氏は、その後まもなく他界したらしく、幼い杜甫は、父の妹で

河東の裴榮期^{はいえいき}のもとに嫁いでいた叔母に引きとられ、その手で育てられることになった。そのころ彼は叔母の子とともに大患におかされ、一時は生死を危ぶまれたが、自分の子を犠牲にした叔母の心づくしによって、やっと一命をとりとめた。それを後召使いから聞かされていたく感動したと、後年彼がこの叔母のために書いた墓誌銘のなかで、忘れがたい思い出として追憶している。これが何歳ごろの出来事であつたか知るよしもないが、それに近いころの思い出として彼が晩年に語るのは、開元三年（七一五）四歳のときのこと。洛陽に近い河南の鄆城^{えん}で、当時世にきこえた名妓公孫大娘^{こうそんたいじやう}が、西域伝来の武舞の一種なる劍器渾脱^{けんきこんだつ}の舞を、勇壮に立ち舞うさまを見物したというのがそれである。一説にこれは開元五年の誤りだともいわれるが、いずれにしても上記の叔母に連れられての舞見物であつたにちがいない。

これにつづく幼少時の記憶を詠じたものに、晩年夔州^きの峽谷にあつて作つた自伝的な長詩「壯遊」がある。そのなかで、

七つの齡^{とし}にして思ひは即ち壯^{まか}んに

口を開きて鳳凰を詠じぬ

九つの齡にして大字を書し

作有り 一つの囊^{ふくろ}を成したり

と述べるごとく、彼の詩作は早くも七歳の幼時にはじまった。当時の士族の子弟としては、とり